

孤独死と「家族幻想」

あの震災からまもなく三年目を迎えるようとしているが、新聞は今も時折、仮設住宅での「孤独死」を伝えている。兵庫県内の仮設で死後数日たって発見された人はすでに百八十人を超え、そのうち男性が七割強を占め、なかでも五十代、六十代が多いという。

ところで、私は五十代で現在一人暮らしだが、この「孤独死」という言葉には単身者に対する偏見が含まれているように思えてならない。「孤独死」という言葉は「誰にも見取られずに死んだ『孤独』な死」という意味で使われているのだから、そこには「家族がいたら、そういうことにはならなかっただろう」というニュアンスが暗に込められている。そのことは、「孤独死」を伝える記事のほとんどが「一人暮らし」ではなく「独り暮らし」の文字を使用していることから、容易に想像することができる。

では果たしてほんとうに「家族がいたらそういうことにはならなかった」だろうか。でもそれでは、女性よりも男性の方に多いことの説明がつかない。単身者の割合は女性の方が圧倒的に高いからである。ではなぜ男性に、それも五十代、六十代に多いの

だろう。

新聞などの記事によると、死亡した男性のほとんどが「無職」となっているが、おそらくもとも無職だったのではなく、震災によって勤め先がつぶれたりして職を失ったのだろう。また、もともと一人暮らしだったわけでもなく、震災によって家族を失ったのではないだろうか。



震災によって家と家族を同時に失った人もいれば、家や職を失ったことがきっかけとなって家族と別れることになった人もいよう。そして、それらのことを理由として生きる気力を徐々に失っていき、その結果としての「孤独死」なのだろう。

話は変わるが、今年の六月に川西市の六十二歳の市議会議長が自宅一人で介護していた妻を衰弱死させている。十月には加古郡播磨町で五十三歳の男性が病気で苦しんでいた妻から「苦しいから殺してくれ」と頼まれたからといって、妻の首を絞めて殺している。私には、これらの事件と仮設住宅での男たちの「孤独死」とは根っこ

のところで繋がっているように思える。

まず一つには、それらの男たちには一人ですべて生きていくための生活的自立、とくにその基本的条件である食生活に關しての知識や技術が欠けていたのではないだろうか。

もう一つは、困った時に誰かに弱音を吐いたり助けを求めるという発想や習慣を持ち合わせていなかったのではないか。「ひとさまに迷惑をかけてはいけない」という考えにとらわれて、そのようなことは「男の恥」だとか「家の恥」だとかいふ意識に縛られていたのではないだろうか。

せいかつエッセー

吉田 清彦

家族を構成する人数が少なくなり、そして、従来家族を外から支えてきた地縁

や血縁の力が弱くなってきているなかで、ひとの世話にならないで家族だけで支えあうことは困難になってきていることを自覚すべきである。

震災をきっかけに家族や地縁の再発見を言う人もいるが、あの時、家族や地縁はほとんど何の役にも立たず、救済物資や救助ボランティアをはじめとする全国からの援助に多くを頼ったことを忘れてはならない。私の場合も、震災直後から心身共に支えてくれたのは、いちばやく疎開先の提供を申し出してくれた人々をはじめ、そのほとんどが血縁・地縁には関係のないサークル活動を通じた仲間たちであった。

単身世帯はすでに全世帯数の二割を超えている。家族の構成員数も今後ますます減少していくことだろう。これからは、行政と地域住民が一緒になって、家族に依存しない「地域での支えあいのネットワーク」をさまざまなかたちで作らなくてはならないことが大切である。それと同時に今は、まさかの時に備えた保険としての「家族以外の人のネットワーク」を、ひとりひとりがどれだけ多く持っているかが問われている時代でもあるようだ。

(三三三「厩台村通信」発行人)